

(実践報告) 抄録用紙

演題名 (全角 80 字以内)	在宅医療を受けている患者に関わる医療職・介護職間の情報共有に ICT ツールであるキュアケアネットを長期間使用して見えてきたこと
演者名	外園智恵子 1) 川上秀一 2) 川上咲子 2) 齋藤俊 2) 桶谷真 2)
所属	1) よしの訪問看護ステーション 2) 内村川上内科

目的：在宅医療に関わる医療職と介護職間で情報共有することは重要で、そのツールとして ICT を使うことは有用と評価されている。しかし、ICT ツールは本当に有用であろうか。私たちは自ら開発した ICT ツールである「キュアケアネット」を 2 年 1 か月間使用後、その有用性と課題について検討する。

実践内容：キュアケアネットの開発運営は自らで行った。初めに医療と介護に関する基本情報を入力後、スケジュール管理や経時的な情報交換を患者毎に共有した。ある患者の情報を閲覧編集できるのは、ある患者に関係するアクセス権を持った人だけである。

実践効果：全職種がインターネット環境とパソコンかスマートフォンがあれば、いつでもどこでも、医療・介護情報を知ることができるため、他職種に連絡を取り教えてもらう手間を省けた。たとえば、ケアマネジャーが現在の内服薬を知りたい場合、主治医に連絡しなくても、キュアケアネットにアクセスすれば処方内容がわかる。サービス担当者会議に参加できなかった場合でも、ケアマネジャーが公開した会議内容を知ることができる。往診や検査が行われた場合、実際に往診や検査に立ち会わなかった他職種のメンバーもキュアケアネットにアクセスすることにより、その要点を知ることができる。

考察：パソコンやスマートフォンなどの ICT デバイスを自在に使うことができれば、キュアケアネットは有用である。しかし、ICT デバイスに対する苦手意識があると、アクセス権を配布されても、インターネット経由で情報を知ろうとしないし、情報発信も行わない。また、ICT リテラシーの問題もある。つまり、どのような情報を共有すべきかは職種、経験により差がある。いずれにせよ、ICT ツールは使いやすく、維持費がかからないことが重要であると思われる。